

BCCWJ および CEJC を用いた終助詞「ね」「よ」の 全体頻度と機能別頻度の調査：日本語教育への応用

原 里咲子(神戸大学国際文化学研究科)

A study on the Overall and Functional Frequencies of the Sentence-Final Particles *Ne* and *Yo* Using BCCWJ and CEJC: Applications to Japanese Language Education

Risako Hara (Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University)

要旨

日本語の終助詞「ね」「よ」は書き言葉や話し言葉において広く使用されるものであるが、その使用は言語環境に強く影響され、用法の全体的把握が困難である。日本語教育の現場においても「ね」「よ」の使い分けに関しては十分な指導がなされているとは言い難い状況である。そこで本稿は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』および『日本語日常会話コーパス(CEJC)』を用い、終助詞「ね」「よ」の出現頻度、ならびに主要な意味機能別頻度について調査を行った。分析の結果、全体として「ね」が「よ」より頻出することや、書き言葉・話し言葉差に加え、「疑似的話し言葉」を特徴づける意味機能の存在が示唆された。本研究で得られた知見は、中上級の日本語学習者向けの教材開発などに活用が可能であろう。

1. はじめに

終助詞の「ね」「よ」は聞き手や読み手への配慮を示すものとして、日本語によるコミュニケーションの円滑な進行に不可欠な要素と言える。「ね」「よ」の重要性に鑑み、日本語教育においても、「ね」「よ」は、通例、学習の初級段階から導入されている。例えば、『みんなの日本語』では初級Ⅰの第5課に「よ」が、第6課に「ね」が出現している。また、英語圏で広く使用されている『げんきⅠ』では第2課に「ね」「よ」が同時に出現している。『げんき』はまた、「ね」「よ」の各々について以下の簡潔な説明を与えている。付記した和訳は拙訳による。

“If the speaker is seeking the listener’s confirmation or agreement to what has been said, then *ne* (“right?”) could be added.” (話し手が自身の発話に対して聞き手の確認や同意を求める場合、「ね」が添加され得る)、

“*Yo* (“I tell you”), is added to a statement if the speaker wants to assure the listener of what has been said. With *yo* added, a statement becomes an authoritative decree.” (話し手が自身の発話について聞き手に確信を持たせたい場合に「よ」が添加されることによって、その発話は権威ある宣告のような性質を帯びる)

このように、日本語学習者は比較的早い段階から「ね」「よ」に触れることとなるわけだが、教科書に示されるのは限られた種類の用例や、簡潔な説明文だけであり、多様な日本語変種における実際の使用動向や、各々の典型的な意味機能などについては十分な説明がな

い。初級段階では上述のような簡素な説明でよいとしても、学習者が中級や上級に達し、受信だけでなく発信に以降していく段階においては、「ね」「よ」の具体的な使われた方について、実際の言語データを根拠とする、より詳細な情報が提供されるべきであろう。

そこで本稿では、中上級日本語学習者向けの発信志向の日本語指導における「ね」「よ」の扱いを考える準備作業として、話し言葉と書き言葉を含む様々な言語変種における2語の出現状況を実証的に調査する。得られた知見は、今後の日本語教育における「ね」「よ」の指導法や教材開発に寄与するものと考えられる。

2. 先行研究

本稿は日本語教育への応用を念頭に「ね」「よ」の用法を考察するものであるが、その基盤となるのは日本語学における「ね」「よ」の意味や機能に関する研究である。そこで本節では、まず日本語学における「ね」「よ」の研究を概観する。次いで、日本語学の中でもコーパス的な手法を用いた研究成果の一部を紹介する。さらに、第二言語習得の観点から日本語教育における研究を整理する。そして最後に、日本語研究におけるモードやジャンル、場面の重要性を指摘する研究について順に概観していく。

2.1 日本語学における「ね」「よ」

終助詞「ね」「よ」の意味機能に関して、これまで両者の意味的対立や、話し手と聞き手との間における情報や認識の帰属関係などといった視点から多くの議論がなされてきた。

まず、時枝(1951)において、「ね」は「聞き手を同調者としての関係に置こうとする主格的立場の表現」、「よ」は「聞き手に対して話し手の意志や判断を強く押し付ける表現」とし、両者が対立的な関係にあると述べた。また、大曾(1986)は、「ね」は原則として話し手と聞き手の情報や判断の一致を前提とするのに対し、「よ」は逆にそれらの食い違いを前提すると述べた。その上で、「ね」の機能について、(1)相手に確認求める、(2)同意を求める、(3)同意を示すものの3つに細分化している。さらに、益岡(1991)も大曾(1986)と同様に、「ね」と「よ」について話し手が聞き手と一致する方向の意向を持っていると判断している場合を「一致型の判断」、対立する方向の意向を持っていると判断している場合を「対立型の判断」として主張した。一方、「よ」の機能について、金水(1993)で、(1)聞き手が知らないと思われる情報を聞き手に知らせるという「教示」、(2)聞き手は知っているとしても目下の状況に関与的であると気付いていないと思われる情報について聞き手に注意を喚起する「注意」、(3)聞き手を想定していない「独り言」の3つの用法を挙げている。

(1) A: 今年も暑いですね。(同意要求)

B: そうですね。(同意)

(2) とんかつは魚じゃないですよ。(教示)

また、「ね」を機能論的な理論から規定したものとして、神尾(1990)が提案した「情報のなわばり理論」が挙げられる。神尾(1990)は、終助詞「ね」について、話し手と聞き手に対する協応的態度を表す標識であると分析しており、協応的態度については、与えられた情報に関して話し手が聞き手に同一の認知状態を持つことを積極的に求める態度であると説明している。この理論における「なわばり」とは情報が話し手の領域に属するものか、聞き手の領域に属するものかを示すものである。

ここまでの先行研究の知見を整理すると、「ね」は話し手のみが持つ情報、聞き手のみが持つ情報、あるいは双方が情報を共有しているかという情報保持者が誰かという前提が見える。一方、「よ」に関しては話し手のみが情報を持っているという状況に限定される。しかし、実際のコミュニケーションにおける「ね」「よ」の使用では、「情報がどちらに属して

いるか」という枠組みだけでは説明しきれない側面がある。

そこで、宇佐美(1997)は、職場での3場面における「ね」を5つのコミュニケーション機能(「会話促進」「注意喚起」「発話緩和」「発話内容確認」「発話埋め合わせ」)に分類し、Brown & Levinson(1987)のボライトネスの観点から分析を行った。

このように、日本語学における終助詞「ね」「よ」の記述をめぐって、様々な捉え方がなされているのが現状である。

2.2 コーパス言語学における「ね」「よ」

前節のような日本語における記述的な知見に対し、実際の談話をデータとして「ね」「よ」を定量的に検証する研究も進められている。

崔(2015)は、母語場面の自然会話をデータにして「ね」「よ」「よね」の機能分類を行った上で、母語話者と学習者による接触場面における終助詞の使用実態をについて分析を行った。同研究では、話し手が命題内容の事柄の領域に応じてこれらの終助詞を使い分けしている点に着目し、各終助詞の談話レベルにおける発話機能が、(1)要求系、(2)提示系、(3)表明系のいずれの発話連鎖効力の特徴を持つかを明らかにした。

また、宇佐美ら(2022)は、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(2020 年版)』に収録されている日中接触場面の雑談における日本語母語話者と上級・初級日本語学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」の使用実態を場面別に調査を行った。その結果、(1)母語話者は初対面会話と友人同士の会話とで終助詞の使い分けが明確であるのに対して、上級学習者は場面による使い分けが不明確であった、(2)上級学習者は、初対面会話と友人同士の会話のいずれにおいても、「よ」を多用する傾向にある、(3)初級学習者は、母語話者のみならず、上級学習者と比べても終助詞の使用率が低く、その中でも「よ」と「よね」に関しては、不自然な使用が多かった、ことなどが明らかになった。これらの結果から、宇佐美ら(2022)は、日本語教育の現場において、人間関係に応じた終助詞「ね」「よ」「よね」の使い分けを指導する必要性や、「よ」の多用が相手に押し付けがましい印象を与えてしまうリスクに配慮すべきであることなどを示唆している。

2.3 第二言語習得研究における「ね」「よ」

日本語において、終助詞はコミュニケーションをとる際に必要不可欠な要素であるが、第二言語として習得する場合、学習者にとってその使い分けが難しいとされている。そこで、白岩(2011)は、第二言語としての日本語の終助詞習得研究について、母語としての習得の事例を踏まえた上で、これまでの研究の整理と展望を行った。これまでの研究の展開としては、1990年代以降、ネ・ノダの習得研究が進められるようになり、2000年代に入ってからにはヨなど他の終助詞にも視点が向けられるようになった。Sawyer(1992)は、教室で学習する日本語学習者を対象とした習得研究から、ネについて、(1)語彙や格助詞といった文法的な助詞よりも習得が遅れること、(2)「そうですね」のようなチャンクの形から使用が始まること、(3)習得にあたって個人差が大きいことなどを指摘した。これに対し、尾崎(1999)が報告するブラジル人就労者による自然習得の場合、早い段階でネが習得されることが確認されている。母語の習得の場合においては、終助詞は他の文法項目よりも早い段階で、誤用を伴わず習得されると考えられている。

一方、「よ」の習得は「ね」よりも困難であると指摘されている。大曾(1986)は、「よ」は「ね」以上に使いこなすのが難しいようだ」と言及しており、大嶋(1989)による面接テストや穴埋め式の筆記テストを用いた研究でも、「よ」の得点が全体的に「ね」よりも低いことが示されている。学習者の「よ」に対する使用意識を調査した西川(2000)では、ぞんざいな印象を与えるという理由から「よ」を目上の人には使わない、丁寧体とは併用しないという話者が多いことが報告されている。また、富並・中村(2004)は、韓国人日本語学習者の「ね」と「よ」を分析しており、「ね」には誤用が見られるものの、「よ」には誤用が見られないと

いう結果が示された。しかし、学習者が「よ」を「人間関係にとってマイナスであると思ひ込む」という水谷(1984)の指摘を踏まえると、学習者が「よ」を使用する場面を限定しているからこそ、誤用が見られないと解釈することも可能である。

2.4 日本語研究におけるモード・ジャンル・場面の重要性

日本語研究において、終助詞の使用を「モード」「ジャンル」「場面」といった観点から議論を行うことも必要不可欠である。

まず、大きな枠組みとして、書き言葉と話し言葉というモードの違いが挙げられる。

橋本(2014)は、書き言葉と話し言葉のそれぞれに見られる文末表現に観点を置き、媒体(文字か音声か)での言葉の差異と男女間での言葉の差異を考察した。その結果、「書き言葉の作られた発話」、「話し言葉の自然会話」、「話し言葉の作られた発話」によって、それぞれ用いられる文末表現の種類や使用数に大きな開きがあることが明らかになった。

また、終助詞が「場面」に応じてどのように用いられるかについて、木山(2017)は、終助詞「よ」「ね」「よね」が対者敬語「です/ます」の有無、および、親疎関係(初対面か友人同士か)を組み合わせでどのように使用されるかについて、線形混合モデリングによって分析を行った。その結果、終助詞「よ」「ね」の対人的機能について、「ね」や「よね」のように「ね」で終わる発話が親しい間柄の普通体と相性がよいという示唆を得た。

しかし、ここまでに「ね」「よ」に関する先行研究を整理してきた通り、書き言葉と話し言葉のジャンル差から分析した研究は、管見の限りほとんど見られない。

3. リサーチデザイン

3.1 目的と研究設問

本稿の目的は、中上級学習者向けの発信型指導における「ね」「よ」の扱いを考えるための予備調査として、現代日本語の多様な言語変種・言語環境における「ね」「よ」の出現頻度と意味機能別頻度を明らかにすることである。調査には『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』と『日本語日常会話コーパス(CEJC)』を使用する。書き言葉と話し言葉という産出モードに基づく大きな区切りでの差異と、ジャンルや場面を加味した言語環境に基づくより細かい区切りでの差異を把握するため、最初に、産出モード間(2区分)での比較を行い、次いで言語環境間(8区分)での比較を行う。以上の目的に沿い、以下の研究設問(RQ)を設定した。

RQ1 2種の産出モードおよび8種の言語環境において、2語の頻度はどのように変化するか？

RQ2 2種の産出モードおよび8種の言語環境において、2語の意味機能はどのように変化するか？

RQ3 8種の言語環境と2語の意味機能はどのように関係しているか？

なお、終助詞「よ」と「ね」は、複合形として「よね」という形を作ることもある。本来、「よね」については独自の単位とみなして扱うべきであると思われるが、今回は「よ」「ね」の差異に着目することを優先し、「よね」については分析から除外する。

3.2 データ

本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス第1部』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, 以下 BCCWJ1)および「現代日本語書き言葉均衡コーパス第2部」(以下 BCCWJ2)、『日本語日常会話コーパス』(Corpus of Everyday Japanese Conversation, 以下 CEJC)のデータを対象に分析を行う。BCCWJ は現代日本語の書き言葉の全体像を把握することを目的とした均衡コーパスである一方、CEJC は多様な場面・多様な話者による

日常会話をバランスよく収集するよう工夫されたコーパスである。そのため、本稿では、それぞれを現代日本語の書き言葉と話し言葉を代表するものとして分析を行う。また、BCCWJ1の書籍、雑誌、知恵袋、ブログ、BCCWJ2の書籍、CEJCの雑談、用談・相談、会議・会合の8種のデータ(コア・非コア)を分析対象とする。

3.3 手法

3.3.1 RQ1の調査

RQ1では、「中納言」検索インタフェースにおいて、前方共起条件を《品詞の大分類が助動詞》、後方共起条件を《品詞の大分類が補助記号》に指定して「ね」と「よ」を抽出した。これにより、「よね」を除外し、「ね」と「よ」が単独で出現している用例のみを抽出する設定にした。

3.3.2 RQ2の調査

RQ2では、「ね」「よ」の意味機能別に頻度調査を行うが、その際必要となるのは2語の意味機能の総体的なリストである。この点を踏まえ、作業に先立ち、5種の国語辞典(『三省堂国語辞典 第七版』、『明鏡国語辞典 第二版』、『新明解国語辞典 第六版』、『岩波国語辞典 第七版』、『旺文社国語辞典 第十二版』)における2語の意味をすべて書き出し、類似のものはまとめ、重複は削除する形で意味機能リストの作成を行った。

表1「ね」の機能

情報の持ち主	機能	意味
共有 S≒L	①同意返答要求	相手に同意を求めるように感動や思いを述べたり、同意を求めたり、返答を促す意を表す(5/5)
	②念押し	相手に親しみの気持ちを添えてやわらかに念を押す(4/5)
聞き手情報 L>S	③確認	事の真偽などについて親しみの気持ちをこめた確認を表す(2/5)
	④疑問	やわらかにたずねる気持ちを表す(3/5)
話し手情報 S>L	⑤コメント	だれにともなく言う気持ちを表す(4/5)
	⑥拒否	相手を納得させようとする気持ちを表したり、ぞんざいに言い放したりする(3/5)
その他	⑦注意喚起	ことばの息の切れ目につけてつなぎとしたり、相手を引き込んだり注意を引きつけたり、語勢を整えたりするようなことば(4/5)

表2「よ」の機能

情報の持ち主	機能	意味
話し手情報 S>L	①伝達(対話的)	主体の意志・感情・判断・意見などを相手に知らせたり、気持ちをあらわしたりする(3/5)
	②念押し	主体の意志・感情・判断・意見などを押し付けたりする気持ちをあらわす(4/5)
	③コメント(独話的)	感動や詠嘆、思いをだれかに知らせるように述べること(4/5)
	④反論	感情的な色合いを付けたり、質問・反問に対して厳しく問い詰める(4/5)
その他	⑤注意喚起	ことばの終わりにつけてつなぎとしたり、相手の注意を引きつけたり、語勢を整えたり、呼びかけたりする(4/5)

続いて、8種の言語環境ごとに、「中納言」より、「ね」「よ」の用例をそれぞれ無作為に100例ずつ抽出した。「よね」が混在していた場合は手作業で除外し、不足分は新たに用例を補充した。

最後に、上記で得られた1,600例のすべてに対して表1、表2の枠組みに基づき、意味機能をコーディングした。作業は筆者が単独で行い、判例に迷うものについては日本語母語話者1名と協議の上で分類を決定した。

3.3.3 RQ3の調査

RQ3では、言語環境(8種)×「ね」「よ」の意味機能(全12種)からなる頻度表に対して、対応分析を適用し、相互の関係性を把握する。対応分析とは、行列間の相関を最大化する軸(次元)を抽出し、説明力の最も高い上位2次元を基準とした散布図上に、各々のアイテムカテゴリーデータを布置する多変量解析手法である。散布図上で近傍に布置されたデータは相対的に類似した性質を持つと解釈できる。なお、本稿では、HAD18.0(清水, 2023)を利用した。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 「ね」「よ」の頻度

産出モード別、言語環境別に頻度調査を行ったところ、以下の結果を得た。なお、頻度は100万語あたりの調整頻度(per million word: PMW)で示している。

表3 100万語あたりの調整頻度(PMW)と構成比

	BCCWJ	CEJC
ね	742.6(47.4%)	5475.8(63.2%)
よ	824.1(52.6%)	3194.5(37.8%)
合計	1566.7(100%)	8670.3(100%)

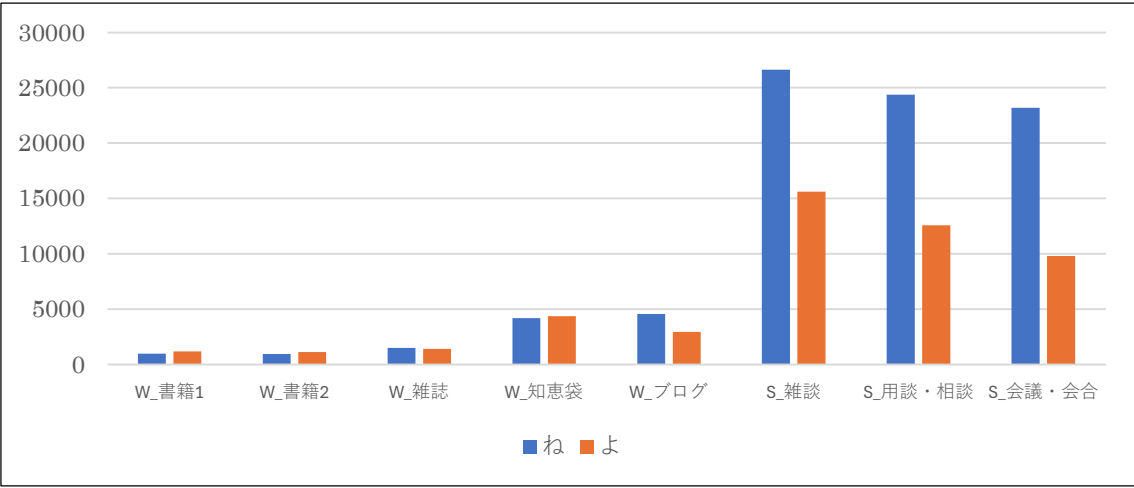


図18 区分における「よ」に対する「ね」の頻度比率

表3より、2語の頻度は話し言葉の方が5倍以上多くなっており、「ね」「よ」が基本的に話し言葉表現であることが改めて確認された。また、書き言葉では「よ」が、話し言葉では「ね」が相対的に他方より多用されることが示唆された。このような結果が生じた背景として、産出モードにおける談話環境の差異が指摘できる。話し言葉は、基本的に話し手と聞き手が同一の時間にやり取りする、同期コミュニケーションであり、双方がその場で情報を共有・保持しているため、相互の同意や確認の機能を担う「ね」が多用されると考えられる。

一方、書き言葉においては、一般的に非対面かつ非同期コミュニケーションであり、不特定多数の読み手を想定して記述されるため、「ね」よりも一方的に情報を発信する機能を担う「よ」が多用されやすいと考えられる。

続いて、図 1 より、書き言葉から話し言葉に移行するにつれて、「ね」の使用量が多くなることが示唆された。話し言葉の 3 種(雑談、用談・相談、会議・会合)においては、いずれも「よ」と比べて「ね」が多用されており、特に「会議・会合」では顕著である。「会議・会合」のような改まった場面においては、自身の意見や考えを一方的に主張する「よ」を用いるよりも、場の進行を円滑に保つために相手へ同意を示したり、発言内容を確認したりする「ね」の機能が多用されていると考えられる。一方、書き言葉に属する「ブログ」においては、他の書き言葉のジャンルと比べて「ね」の頻度が高く、話し言葉のジャンルと類似している。その背景として、「ブログ」が書き言葉でありながらも特定の読者やフォロワーの存在を強く意識した媒体であり、読者への語りかけや共感を得ることが重視されるという性質を持つため、「ね」の出現頻度が高くなると考えられる。

4.2 RQ2 「ね」「よ」の意味機能

続いて、産出モード別、言語環境別に意味機能別の頻度調査を行ったところ、以下の結果を得た。

まず、産出モード間における意味機能別の頻度およびその比率について確認する。

表 4 産出モード別「ね」の主要機能

順位	BCCWJ	頻度	比率	累計比	CEJC	頻度	比率	累計比
1	コメント	32	0.32	0.32	注意喚起	38	0.38	0.38
2	同意返答要求	22	0.22	0.54	同意返答要求	33	0.33	0.71
3	確認	15	0.15	0.69	コメント	12	0.12	0.83
4	疑問	14	0.14	0.83	確認	10	0.10	0.93
5	注意喚起	9	0.09	0.92	疑問	4	0.04	0.97
6	念押し	8	0.08	1	念押し	3	0.03	1
7	拒否	0		-	拒否	0		-

表 5 産出モード別「よ」の主要機能

順位	BCCWJ	頻度	比率	累計比	CEJC	頻度	比率	累計比
1	伝達	41	0.41	0.41	伝達	77	0.77	0.77
2	念押し	19	0.19	0.60	念押し	13	0.13	0.90
3	注意喚起	18	0.18	0.78	コメント	5	0.05	0.95
4	コメント	15	0.15	0.93	反論	3	0.03	0.98
5	反論	7	0.07	1	注意喚起	2	0.02	1

表 4 より、書き言葉と話し言葉の間では「ね」における典型的機能に顕著な差が見られることが確認できる。

書き言葉において最も出現頻度が高い機能は「コメント」であり、全体の約 3 割を占める結果となった。次いで「同意返答要求」「確認」「疑問」の順となり、また、累計比に着目すると、これらの上位 4 機能で全体の 8 割を占めていることが分かる。一方、話し言葉において最も出現頻度が高い機能は「注意喚起」であり、全体の約 4 割を占める結果となった。次いで「同意返答要求」「コメント」の順となり、これら上位 3 機能のみで累計比 8 割以上に達した。

以下、それぞれの用例を見てみよう。

- (3) 監督を見てて、つくづく監督は大変なんだなあ、と思いましたね〈コメント〉(2005 年 Yahoo!知恵袋)
- (4) 簡単な銃なら短時間で手に入れられそうね〈同意返答要求〉(図書館・書籍)
- (5) 2 年後が三回忌になりますので今年で十五回忌になりますね〈確認〉(2005 年 Yahoo!知恵袋)
- (6) 普通じゃないってどういうことだね〈疑問〉(図書館・書籍)
- (7) いつもね、あのタブレットしか見てない〈注意喚起〉(CEJC 会話 ID:T019_010)
- (8) たぶん最後まっすぐにしないといけないのが面倒くさいですね〈同意返答要求〉(CEJC 会話 ID:T019_010)
- (9) あんまりよくないかもね〈コメント〉(CEJC 会話 ID:K003_013)

上記のように、書き言葉と話し言葉のいずれにおいても、「コメント」および「同意返答要求」は共通して上位を占める主要機能であった。しかし、実際に用例を確認したところ、各産出モードにおける談話環境の差異が、「ね」「よ」の使用に反映されていることが明らかになった。話し言葉においては、対話するという観点から相手と向き合っている。そのため、話し言葉における「コメント」は、誰にともなく言う気持ちを吟んでいるつもりであっても、自身の内面的な心情がその場で相手に伝わってもよいという心理的な働きが作用していると考えられる。また、(7)のように発話途中で聞き手の注意を引きつけたり、発話内容を逐一確かめたりするなど聞き手の反応をリアルタイムで強く意識するがゆえに、話し言葉では「ね」が多用されていると考えられる。一方、書き言葉の特徴として「疑問」の機能が話し言葉よりも多く用いられているが挙げられる。書き言葉における「疑問」の用例を確認したところ、「～かね」の形式を伴うものが多く見られた。現代の日常会話においては、こうした表現で疑問を表すことが少なく、小説の台詞といった「疑似的な話し言葉」という特殊な言語環境において、「ね」が「疑問」として用いられている。

また、表 5 より、書き言葉と話し言葉のいずれにおいても、「よ」の典型的機能は「伝達」であることが確認された。書き言葉において累計比が 8 割を超えるのは「伝達」「念押し」「注意喚起」「コメント」の 4 機能に分散しているのに対し、話し言葉においては「伝達」「念押し」の 2 機能のみで累計比 9 割に達する結果となった。

以下、それぞれの用例を見てみよう。

- (10) カーテンってめっちゃ高いですよ〈伝達〉(2005 年 Yahoo!知恵袋)
- (11) 自分で出来る簡単な第一歩を踏み出そうよ〈念押し〉(2008 年 Yahoo!ブログ)
- (12) さっさと白状しろ、近所のおじさんよ〈注意喚起〉(図書館・書籍)
- (13) いつも涙を溜めて父を見上げていたのよ〈コメント〉(特定目的・韻文)
- (14) それをさ人から聞いて探したらあったんだよ〈伝達〉(CEJC 会話 ID:T010_015)
- (15) だからそりゃそうだよ〈念押し〉(CEJC 会話 ID:T015_019)

上記のように、書き言葉においては、不特定多数の読み手への情報「伝達」から、「神よ…」のような台詞や呼びかけの際に用いられる「注意喚起」に至るまで、幅広い機能が見られる。一方、話し言葉においては、「伝達」や「念押し」といった中心的な機能が多く見られた。これは、西川(2000)が指摘する通り、「よ」がぞんざいであるために、実際のコミュニケーション上において「よ」の使用が消極的になっていることが考えられる。

次に、8 種の言語環境における意味機能別の頻度を概観する。

表 6 言語環境別「ね」の主要機能

順位	W_書籍 1	W_書籍 2	W_雑誌	W_知恵袋	W_ブログ	S_雑談	S_用談・ 相談	S_会議・ 会合
1	コメント (30%)	コメント (28%)	コメント (35%)	同意返答 要求 (41%)	同意返答 要求 (44%)	注意喚起 (49%)	注意喚起 (38%)	同意返答 要求 (45%)
2	念押し (21%)	同意返答 要求 (28%)	同意返答 要求 (22%)	コメント (28%)	コメント (17%)	同意返答 要求 (27%)	同意返答 要求 (34%)	注意喚起 (30%)
3	同意返答 要求 (16%)	確認 (15%)	念押し (18%)	念押し (14%)	念押し (13%)	確認(8%)	確認 (13%)	確認 (10%)
4	確認 (12%)	念押し (12%)	確認 (10%)	疑問(8%)	確認 (12%)	コメント (8%)	コメント (7%)	疑問(6%)
5	注意喚起 (12%)	注意喚起 (8%)	注意喚起 (10%)	確認(5%)	注意喚起 (12%)	念押し (5%)	念押し (4%)	念押し (4%)
6	疑問(7%)	疑問(6%)	疑問(4%)	注意喚起 (4%)	疑問(2%)	疑問(3%)	疑問(4%)	コメント (30%)
7	拒否(2%)	拒否(3%)	拒否(1%)	拒否(0%)	拒否(0%)	拒否(0%)	拒否(0%)	拒否(1%)

表 7 言語環境別「よ」の主要機能

順位	W_書籍 1	W_書籍 2	W_雑誌	W_知恵袋	W_ブログ	S_雑談	S_用談・ 相談	S_会議・ 会合
1	伝達 (50%)	伝達 (55%)	伝達 (87%)	伝達 (88%)	伝達 (74%)	伝達 (77%)	伝達 (77%)	伝達 (81%)
2	注意喚起 (36%)	注意喚起 (36%)	注意喚起 (8%)	コメント (6%)	念押し (11%)	念押し (11%)	念押し (13%)	念押し (10%)
3	念押し (4%)	コメント (6%)	念押し (4%)	念押し (2%)	コメント (6%)	コメント (10%)	反論(6%)	反論(6%)
4	コメント (4%)	念押し (2%)	コメント (1%)	反論(2%)	注意喚起 (6%)	反論(5%)	コメント (4%)	コメント (3%)
5	反論(4%)	反論(0%)	反論(0%)	注意喚起 (1%)	反論(3%)	注意喚起 (0%)	注意喚起 (0%)	注意喚起 (0%)

表 6 より、「ね」について、書き言葉では「コメント」「同意返答要求」「念押し」が典型的機能として見られる一方、話し言葉では「注意喚起」「同意返答要求」「念押し」の 3 機能が典型的機能として見られ、産出モードによる意味機能別の頻度に差異があることが確認された。言語環境別に着目すると、「知恵袋」や「ブログ」の Web メディアにおいて、最も出現頻度が高い機能は「同意返答要求」であり、これは話し言葉の 3 種と出現傾向が類似している。しかし、これらの Web メディアでは、「コメント」や「念押し」の機能が低い比率を維持しており、書き言葉としての性質も十分に兼ね備えていることが分かる。一方、話し言葉の 3 種では、「注意喚起」が多用されており、これが書き言葉との決定的な違いであると考えられる。

続いて、表 7 より、「よ」はいずれの環境においても「伝達」の機能を一貫して担っていることが改めて確認された。特に、話し言葉においては、話し手が保持している情報を聞き手に教示するという役割として「よ」が用いられているということが裏付けられた。

4.3 RQ3 言語環境と「ね」「よ」の意味機能の関係

最後に、言語環境（8 種）×2 語の意味機能（全 12 種）からなる頻度表に対応分析を適用したところ、以下の結果を得た。

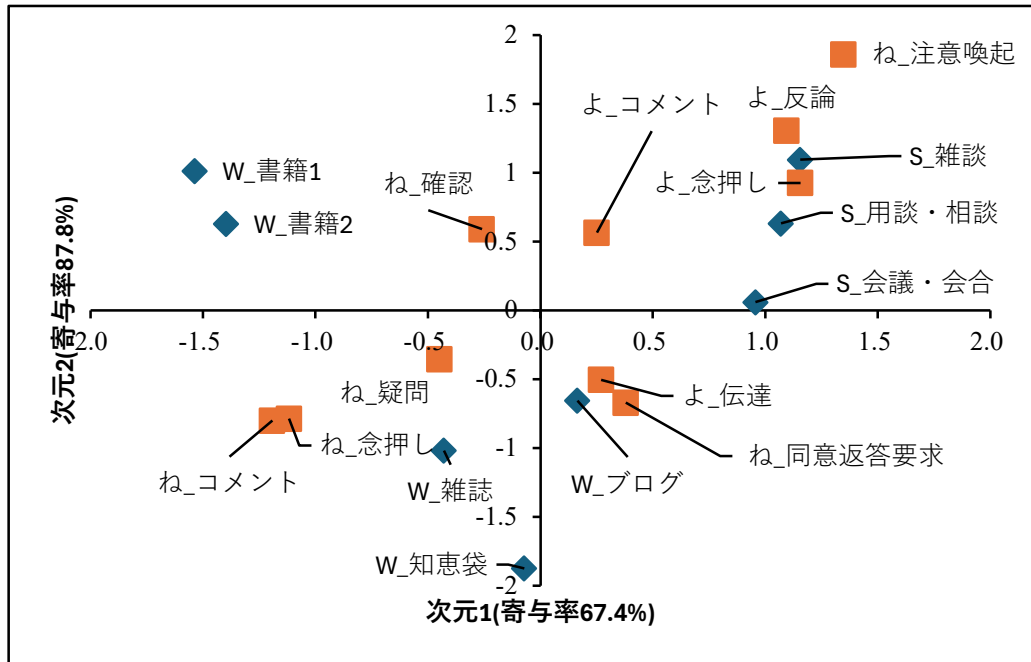


図 2 対応分析による言語環境と「ね」「よ」の意味機能の布置状況

対応分析に基づく散布図では、優先軸である第 1 軸によって分割される左と右が、最も重要な区分ということになる。

まず、図 2 について、第 1 軸(横軸)の寄与率は 67.4%、第 2 軸(縦軸)の寄与率は 87.8% であった。図 2 より、左側の領域には、書き言葉の 4 種(書籍 1、書籍 2、雑誌、知恵袋)が布置されており、右側の領域には、話し言葉の 3 種(雑談、用談・相談、会議・会合)に加えて書き言葉に属する「ブログ」が布置されている。このことから、書き言葉と話し言葉という産出モードの枠組みを超えて、書き言葉と「話し言葉+ブログ」の 2 群に分かれることが確認できる。

特に、話し言葉の「雑談」においては「ね_注意喚起」と近い位置にある。これは話し言葉において、「あのね、今日ね」のように語勢を整えたり、発話途中に「ね」を付与しながら会話を展開したりしているためであると考えられ、書き言葉との大きな違いであると言える。一方、「ブログ」の周辺には、「よ_伝達」および「ね_同意返答要求」が近くに位置している。これは、前節で述べたように、話し言葉の性質に接近していることを示している。また、書き言葉の「書籍 1」「書籍 2」の周辺には「ね_確認」が、「雑誌」の周辺には「ね_コメント」「ね_念押し」「ね_疑問」が近くに位置している。これは、実際に対話する相手の存在が見えない書き言葉であるがために、主観的な意見や自身の気持ちを反映させた「コメント」や「念押し」の機能との結びつきが反映された結果であると考えられる。

次に、第 2 軸に注目する。散布図の上部には、話し言葉の 3 種(雑談、用談・相談、会議・会合)や書き言葉の 2 種(書籍 1、書籍 2)が布置されている。一方、散布図の下部には、書き言葉の 3 種(雑誌、知恵袋、ブログ)が布置されている。これらより、第 2 軸では、その場で双方のやり取りが発生するか、あるいは一方的な発信に留まるかという対話プロセスの違いが反映している。「書籍 1」や「書籍 2」には小説の台詞が多く含まれており、これらは話し言葉と同様に、登場人物が対話し、同期コミュニケーションをとるという点で共通する。

これに対し、下部に布置された書き言葉における言語環境では、一方的に記述して完結する性質であり、相互のやり取りは発生しない。

以上より、8種の言語環境と2語の意味機能の間には関連性が認められ、「ね」「よ」の意味機能は、産出モードだけでなく、言語環境によっても密接に関連していることが示唆された。

5. まとめ

本研究では、書き言葉(BCCWJ)と話し言葉(CEJC)を用いて、終助詞「ね」と「よ」の使用実態と主要な意味機能について定量的な調査を試みた。

分析の結果、(1)「ね」と「よ」は書き言葉に比べて話し言葉において多く用いられているということ、(2)話し言葉では「注意喚起」や「同意返答要求」の機能を担う「ね」が多用される一方、書き言葉では一方的、あるいは主観的な「コメント」の機能を持つ「ね」のが多く用いられているということ、(3)書き言葉と話し言葉のいずれにおいても、「よ」は伝達の機能として最も用いられているということ、(4)言語環境別の調査において、書き言葉と話し言葉という産出モードの枠組みだけでなく、その場で双方のやり取りが発生するか否かという対話プロセスの違いも、「ね」「よ」の意味機能の出現に影響を与えているということ、(5)書き言葉ではあるが読者への語りかけを意識する「ブログ」が話し言葉と類似した性質を持っていること、等が明らかになった。

本研究により、終助詞「ね」と「よ」の実際の使用傾向や産出モード別、言語環境別における機能の差異について明らかにすることができた。得られた知見は、従来の教材に見られる限定的、かつ抽象的な指導や解説に対し、実際のコミュニケーションに即した具体的な指導法の開発や教材開発における指針となることを期待する。

今後は、学習者コーパスなどを用いて学習者の「ね」と「よ」の使い分けやその習得プロセスについても検討していくことが課題である。

文 献

- Brown, P. and S. C. Levinson (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- 橋本梨沙(2014)「書き言葉と話し言葉の文末表現—媒体・男女間の差異—」日本文学 110, 217-232.
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館書店.
- 金水敏(1993)「終助詞ヨ・ネ」月刊言語 22(4), 118-121.
- 木山幸子(2017)「日本語の話し言葉における対人距離の調節：対者敬語と終助詞の使い分け」三重大学教養教育機構研究紀要 2, 29-36.
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文末』くろしお出版.
- 水谷信子(1984)「誤用分析 4 きのうち新宿へ映画を見に行きましたね—聞き手への関心を示す表現の誤用と非用」日本語学 3(7), 113-115.
- 西川弘達(2000)「終助詞『よ』使用に関する学習者の認識」南山大学国際教育センター紀要 1, 195-207.
- 大嶋真紀(1989)「外国人の発話を不自然にする要因の分析—中・上級日本語学習者の終助詞の使用をめぐる」鹿児島大学史学科報告 36, 103-112.
- 大曾美恵子(1986)「誤用分析 1 『今日はいいい天気ですね。』—『はい、そうです。』」日本語学 5(9), 91-94.
- 尾崎明人(1999)「就労ブラジル人の発話に見られる助詞の縦断的研究(その 1)—終助詞「ね」を中心として」日本語・日本文化論集 7, 91-107.

Sawyer, M. (1992). The development of pragmatics in Japanese as a second language: The sentence-final particle *ne*. Gabriele Kasper(ed.) *Pragmatics of Japanese as native and target language*. Honolulu: Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa, 238-254.

白岩広行(2011)「第二言語としての日本語の終助詞習得研究の展望」 阪大社会言語学研究ノート 9, 66-95.

時枝誠記(1951)「対人関係を構成する助詞・助動詞」 国語国文 20(9), 1-10.

富並美希・中村渉(2004)「日本語の終助詞習得に関する横断的研究—韓国人日本語学習者の語用分析に基づいて—」 言語科学会第6回年次国際大会論文集, 187-192.

崔英才(2015)「日本語母語場面における終助詞「よ」の一考察—発話連鎖効力に基づく分析枠組みの試み—」 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 292, 31-44.

宇佐美まゆみ(1997)「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」 現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』 241-268, ひつじ書房.

宇佐美まゆみ・張未来(2022)「雑談における日本語学習者による不自然な終助詞「ね」「よ」「よね」:『BTSJ 日本語自然会話コーパス(2020年版)』を用いて」 国立国語研究所論集 23, 29-57.

関連 URL

コーパス検索アプリケーション『中納言』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>